

北の不思議な話

小川未明

青空文庫

おせんといつて、村に、唄の上手な女がありました。たいして美しいというのではなかったけれど、黒い目と、長いたくさんな髪を持った、快活な女でありました。機屋へいつて働いても、唄がうまいので、仲間からかわいがられていました。

これらの娘たちは、年ごろになると、たいていは近傍の村へ、もしくは、同じ村の中で嫁入りをしましたのに、どうした回り合せであるか、おせんは、遠いところへゆくようになったのです。村で、おせんの望み手がないのでなかった。そればかりでなく、みんなは、その結婚をいいと思わなかった。しかも、彼女は孤児であつて、叔母さんに育てられたのであるが、叔母さんも、

この結婚には不賛成でした。なぜなら、相手というのは、遠い旅から行商にきた、貧しげな青年だったからです。

この青年は、村へやってきて、娘たちに、貝がら細工や、か

んざしや、香油のようなものを並べて商つたのです。そして、と

きに、彼は山のあちらの国々の珍しい話などを聞かせたりしま

した。おせんは、あるとき、彼が、子供の時分に両親に別れ

て、その父母の行方がわからないので、こうして、旅から旅へさ

すらつて探しているという話を聞いたときに、同じ孤児の身の

上から、彼に同情するようになったのでした。

「私たちは、山のあちらの明るい国へ行って、働いて暮らしまし

よう。」と、二人は誓い合つた。

叔母おばさんも、ついに二人ふたりの願ねがいを許ゆるさなければならなかった。

そして、二人ふたりが、家いえを出でるときに、

「いつまでも、達者たっしやで、仲なかよく暮くらすがいい。」といって、見み送おくつたのでした。

いつのまにか、月日つきひはたつてしまった。そして、彼女かのじよのこと

は、おりおり、村人むらびとの口くちの端はに上のぼるくらいのもので、だんだんと忘わすれられていった。村むらの機屋はたやでは、あいかかわらず、若い女わかおんなの機はたを織おる音おとが聞きかれ、唄うたの声こゑが、家いえの外そとへひびいていたのです。

ある年としの秋あきも、やがて、逝ゆこうとしていました。沖おきの雲くも切れのした空そらを見みると、地平線ちへいせんは、ものすごく暗くらかったです。そして、里さとの子供こどもたちは、丘おかへ上あがって、色いろづいたかきの葉はなどを拾ひろて、

つていました。

この日、ふいに、おせんが、村へ帰ってきました。彼女の姿は、昔とは変わっていたけれど、そのもののいいぶりや、黒い、うるおいのある目つきには、変わりがなかった。

「どうして、帰ってきた？」と、彼女を知っている人たちは、たずねました。

「わたしには、もう二人の子供があります。夫が長い間、病気で臥ていますので、知った人に買っていただくと思って、商いにまいりました。どうか、わたしの持ってきた品物を買ってください。わたしは、船に乗って、荒海を渡ってやってきました。」

むらひと
村の人たちは、顔を見合わせた。

「このごろ、沖の方は、暴れているだろうに……。」

「まあ、どんなものを持つてきたか……。」

おせんは、持つてきた品物を、みんなの前に拵げて見せました。いつか、青年が、行商にきた時分に持つてきたような青い貝細工や、銀のかんざしや、口紅や、香油や、そのほか女たちの好きそうな紅い絹地や、淡紅色の布などであったのです。

「娘たちが見たら、さぞ喜ぶことだろう。男には用のないものだ。」

「ああ、男には、用のないもんだ。帰つて、女たちに話して聞か

せるべい。」

男どもは、体よくその場を引き揚げました。しかし、女たちも、おせんが帰ったと知って、品物を見にやってきたものは、まれだったのであります。

おせんは、あちらから流れてくる、機屋でうたっている唄を聞いて、自分の昔を思い出して、涙ぐんでいました。

「おせんや、雪の降らないうちに、帰ったらいいだろう……。」「と、叔母さんは、いいました。

もう、このごろは、毎日のように天気は暴れていました。おせんは、せつかく持ってきた品物をしよつて、二度とこの村へはくることもなからうと思いいながら、暇ごいに歩いたのでした。

海の上は、もはやゆくことができなかつた。彼女は、あちらの山を越えてゆかなければならなかつた。村の人々の中でも、おせんをかわいそうに思つたものもあります。

「こんなお天気に、女の身である山が越えられるだろうか？」
 彼女が旅立ちをしてから、叔母さんは毎晩のように、門口に立って、あちらの山の方を見て案じていました。雨が降つたり、みぞれになつたり、風が吹いたりして、満足の日がなかつたのでした。

ちようど、おせんが、あの山にかかる時分でありました。西の空が、よく晴れて、雲の色が、それは美しかった。さながらおせんが持つてきた、貝細工のように、銀のかんざしのように、紅

い絹きぬを拵ひろげたように、淡紅うすべにいろ色の布地ぬのじを見るように、それらのものをみんな大空おおぞらに向かむつて投げ撒まいたように……。

お婆おばさん、この景色けしきを見て、

おせん、

おせん、

にしそらの空そらに、

べに紅べにさした……。

とよろこいって、喜よろこびました。

これから、この文句もんくは、長ながく北ほつこく国のこに残のこつて、子供こどもたちが、いまでも夕焼ゆうやけ空ぞらを見みると、その唄うたをうたうのであります。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 6」講談社

1977（昭和52）年4月10日第1刷

底本の親本：「未明童話集3」丸善

1928（昭和3）年7月6日

※表題は底本では、「北《きた》の不思議《ふしぎ》な話《はなし》」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：栗田美恵子

2020年4月28日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

北の不思議な話

小川未明

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>